

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 23 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520710

研究課題名(和文) ビジネス英語能力の明確化 - 大学生のためのCan-Do List作成

研究課題名(英文) Using a 'Can-Do' List to Establish a Baseline for Japanese University Students' Acquisition of Business English

研究代表者

藤尾 美佐 (Misa, Fujio)

東洋大学・経営学部・准教授

研究者番号：20350712

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1) ビジネスパーソンのニーズ調査、2) 英語ビジネス・プレゼンテーション能力、3) 会議での英語コミュニケーション能力の調査を行った。1) では、海外に進出する企業のインタビュー調査を中心に、2) では、大学対抗の英語ビジネスプレゼンテーション・コンテストを実施し、ビジネスパーソンと大学教員の評価観点の違いを分析した。さらにアンケート調査を行い、大学生のためのCan-Do リストを作成した。3) では、会議のシミュレーションを行い、発話交替に影響を与える要因を分析した。これらの結果は、語学教育エキスポやAILAを始めとする学会で発表するとともに、研究成果報告書(128頁)にまとめている。

研究成果の概要(英文)：This project deconstructed Business English ability to clarify a relevant baseline for Japanese university students. The study focused on business presentation skills and meeting skills based on the interviews conducted with business people who have extensive overseas experience. As regards business presentation skills, differences in assessed standards by business people and by professors were compared using evaluation sheets collected during business presentation contests. Based on these results, as well as a follow-up survey, a 'can-do' list was devised for university students. To establish standards in relation to meeting skills, underlying factors influencing turn-taking were identified through analysis of a simulated meeting. Such analysis showed that a speaker's linguistic ability was the main determinant in turn-taking while the final decision was most influenced by the professional expertise suggested by business people.

研究分野：英語教育 異文化間コミュニケーション 国際ビジネスコミュニケーション

キーワード：ビジネス英語 ニーズ調査 英語ビジネスプレゼンテーション 英語による会議 教室内での指導

1. 研究開始当初の背景

国際競争力がこれまで以上に必要となる今日、アジア諸国では英語教育にしのぎを削っている。中国では、ビジネス英語学部などの設立が相次ぎ、香港では大学・ビジネス界が連携しての大規模なコーパスなども作成されている(HKFSC)。しかし日本は、研究面でも教育面でも遅れをとっているのが現状である。こうした状況に大学として対処、貢献するためには、ビジネス場面のESR(English for Specific Purposes)研究をさらに発展させる必要があり、そのためにはまず、現場でのより実態に即したニーズ・アナリシスを行うことが急務である。研究代表者自らが外資系企業で働いていた経験から、現場で必要とされる英語能力と大学での教育のギャップを明確にし、より実践的なESP教育を発展させる必要性を感じ、ビジネス現場、大学、学生の3分野によるニーズ分析を行う本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

グローバル化に伴い、これまで以上にビジネスの場で英語力が求められるようになったが、大学でのビジネス英語教育はビジネス英語教材に頼るところが多く、現場で必要とされるジャンルごとの英語能力の分析や、さらにそれを流暢性・正確性などとの英語能力と結び付けている先行研究はいまだ非常に限られた状況である。本研究では、ビジネス英語能力を体系的に把握するため、ビジネス現場、大学教員、学生の3分野によるニーズや課題を分析し、大学教育の実践に結びつけるため、大学生が具体的に何をできるようになればいいのかという目標設定とその後の省察のためのCan-Do List作成を目的とした。

3. 研究の方法

広くニーズ分析を行うための代表的な調査はアンケートであるが、本研究では、そのニーズを実際の大学教育の場により具体的に落とし込むため、質的調査も盛り込み、以下のような工夫を考えた。

- 1) フォーカス・グループやインタビュー調査などの質的分析を取り入れることにより、ビジネス現場でのニーズをより正確に把握する。可能であれば、実際の発話データを入手し分析することによって、より具体的な問題点や大学への問題提起を考える。
- 2) ビジネス現場と教育の場でのギャップを明らかにするため、学生による実践(発表)の場を企画し、大学教員、ビジネス・パーソンによる評価観点の違いなどを分析する。
- 3) それを基に大学生のためのCan-Doリストを作成し、研究の枠にとどまらず、実践の英語教育につなげることを目的とする。

これらの工夫は、より具体的には以下のような形で実現された。

1) に関しては、ビジネス現場のニーズ調査として、海外に進出する日系企業の社長や人事副部長、また日本の老舗企業の社長へのインタビュー調査を行い、質的分析を行った。

2) 3) については、語学教育エキスポ2013、言語教育エキスポ2014年(いずれも早稲田にて3月に実施)の中で大学対抗の英語ビジネス・プレゼンテーション・コンテストを実施し、学生に実践の場を与えると同時に、大学教員とビジネス・パーソンの両者をコメントーターとして招くことにより、学生・大学・ビジネス現場の三者によるセッションを可能にした。その際に回収した評価表からは、ビジネス・パーソンと大学教員の評価観点の違いを質的に分析し、それを基にアンケートを作成し、Can-Doリスト作成へとつなげていった。

さらに、上記エキスポの間に、ビジネス・パーソンを集めてのフォーカス・グループを行い、ビジネス・パーソンから見た大学生に必要な英語能力、大学での教育について意見を集約した。

プレゼンテーションに加え、ビジネスミーティングに必要な英語能力を分析するため、ビジネスミーティングのシミュレーションを行った。これは、実際に会議でどのような英語が使われ、どのような問題が起こるのか、また英語力以外に必要な能力はどのような能力かを、質的に分析するためである。特に、英語能力とビジネスの知識を中心に、どのような要因が会議での発話量や発話交替に影響を与えているかの分析を行った。

これらの結果は、最終報告書として128頁にわたる刊行物にまとめたが、以下の研究成果報告では、この要約として、1) ビジネス現場でのニーズ調査、2) 英語プレゼンテーション能力、3) ビジネスミーティングに必要な英語能力、4) 大学での授業への応用、の順に報告する。

4. 研究成果

1) ビジネス現場でのニーズ調査

本研究は、小池・寺内(2010)の大規模なアンケート調査や、Fujio(2008)の外資系企業における調査のほか、国際ビジネスコミュニケーション、IBD(Intercultural Business Discourse)などの近接分野における先行研究をまず詳細に調査し、日系企業の海外支店で働く社長、人事副部長、さらに海外に進出する老舗日本企業の社長、計4名のインタビュー結果をまとめた。詳細は報告書でまとめているが、以下のように集約できる。

ビジネスで必要となる英語コミュニケーション能力は、(ビジネス的要素はもちろん)英語力のみならず、論理的思考、発信力、会話のマネジメント能力(発話交替や話題の提示など)、および異文化能力が求められている。

英語力に関しては、職種によってかなりのばらつきがあり、これらをひとまとめにして論じることの危険性についても指摘している。また、特に注目すべきなのが、異文化能力 (Intercultural Competence) と言えるだろう。この能力に関わる能力として、Byram (1997) は、社会的能力 (Social Competence)、社会文化的能力 (Socio-cultural Competence)、方略的能力 (Strategic Competence) をあげているが、中でもコミュニケーションストラテジーを使いこなす能力 (方略的能力) は必要であると考え。なぜなら方略的能力は、話者の言語能力と背景知識、および文脈からの情報を統合する管制塔のような能力 (Bachman 1990) であり、海外経験の長い被験者でもこの使用を報告しているためである (中谷 2010)。こうした能力の育成は、今後の日本の英語教育の1つの重要な核となることが、改めて調査結果から得られた。

< 引用文献 >

小池生夫、寺内一、高田智子、松井順子 (2010) 『企業が求める英語力』朝日出版社

中谷安男 (2010) 「国際ビジネス英語の到達目標に関するインタビュー調査-CEFR-J の質的研究への考察」東京理科大学紀要 42, 91-109.

Bachman, L. F. (1990). *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford: Oxford University Press.

Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Clevedon, UK: Multilingual Matters Ltd.

Fujio, M. (2008). Positive and negative effects of English communication in foreign-affiliated companies operating in Japan. *Journal of International Business Communication Association*, 67: 61-72.

2) 英語ビジネスプレゼンテーション能力

英語プレゼンテーション能力は、どのような調査においても高い重要度を伴って報告される能力である。本研究では、語学教育エキスポ2013、言語教育エキスポ2014において、大学対抗の英語ビジネスプレゼンテーション・コンテストを実施し、英語教員のみならず、ビジネスパーソンからもコメントをもらう実践的な機会を提供し、ビジネス・パーソン、大学教員、学習者の三者が集いディスカッションする機会を提供した。学生からのフィードバックでも、ビジネスの実践的なコメントと教員からの英語に関するコメントの両方があったことが高く評価されていた。

また、その際評価に使用された評価表より、両者の評価観点の違いについて分析を行った。その結果、ビジネス・パーソンが、プレゼンテーションの内容 (ビジネス上のアイデア) やパフォーマンス面を重視するのに対し、大学教員は英語面 (とくに文法や語彙の使用のミスなど) に注意しがちなことが明らかになった。さらに、評価表を基に最終的なアンケートを作成し、ビジネス・パーソンと大学教員の両方に実施した。アンケート結果からは、「パフォーマンス」「構成」「的確さ」「ビジネス的要素」「印象」の5因子、23項目が抽出され、英語ビジネスプレゼンテーションのためのCan-Do リストとして、言語教育エキスポ2015で報告した。今後のクラスルームの指導にも役立てて欲しいリストである。

3) ビジネスミーティングに必要な英語能力
この能力に関しては、アメリカ人英語母語話者、日本人大学生 (英語能力の高い学生・低い学生) と日本人ビジネス・パーソンの4名からなる3つのグループで同じテーマでの会議をしてもらい、その発話交替と意思決定の流れ、およびコミュニケーションストラテジーなどを分析したものである。会議を積極的に運営していたのは、母語話者と英語のできる大学生であったが (そのため英語能力が大きな影響を与えていると考えられるが)、意思決定に際しては、ビジネス経験のあるビジネス・パーソンが、どのグループにおいても大きな影響を与える発言を行っており、会議内容における専門知識の重要性も裏付けられた。この発表は、後述する第5回 GABC 国際大会 (Global Advances in Business Communication) で Best Paper Award を受賞し、GABC Journal 第3号にも掲載されている。

4) 大学での授業への応用

最後に、英語ビジネス・プレゼンテーションを大学英語教育の場でどのように指導していくかの実践報告を行っている。パワーポイントの作成を通して、メッセージ構成や表現をどのように教えていくかの報告と、大学生が陥りやすい問題点についての報告を行っている。特に大学生は、Introduction の中でプレゼンの構成を提示できない、Introduction と Conclusion が一致していない、評価する教員だけを audience と考えている、などの課題が残っていることが報告されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

Fujio, M. (2014). New opportunities BELF can create for Japanese business

people in intercultural business scenes: How can we become successful "native-speakers" of BELF? 同志社商学、第 65 巻 5 号、95-111 頁 (2014 年 3 月) (査読無)

Fujio, M. (2014). The role of linguistic ability and business expertise for turn-taking in intercultural business communication. *Global Advances in Business Communication, Vol 3, Article 4 (1-28)*. (2014 年 11 月) (査読有)

森田 彰 (2014) 「英語教育における 3 つの論点」 懇話エッセイ シリーズ「研究の未来」 関東英文学研究 No. VII、日本英文学会関東支部、pp.41-46 (pp.81-86) (査読有)

藤尾 美佐 (2013) 「伝統工芸の海外進出を支える英語コミュニケーション能力」 国際ビジネスコミュニケーション学会 研究年報、第 72 号、29-38 頁。(査読有)

〔学会発表〕(計 8 件)

藤尾美佐 (2014) 「英語ビジネス・プレゼンテーションの評価: ビジネスマンと大学教員の評価ポイントの相違点」 国際ビジネスコミュニケーション学会 (JBCA) 第 74 回全国大会: 神戸市外国語大学 2014 年 10 月 4 日

Morita, M. (2014) Japanese university students' perceptions about the importance and the necessity of English as an international language: What happens when the perceptions contradict?' (Poster, co-presented with TANAKA, S.) BAAL 2014 (The British Association for Applied Linguistics): The University of Warwick. 2014 年 9 月 5 日

Fujio, M. (2014) Differences between professors and professionals in evaluating business presentations. AILA World Congress 2014: Brisbane Convention & Exhibition Centre. 2014 年 8 月 11 日

Fujio, M. (2013) Turn-taking strategies for Intercultural Communication. JACET (大学英語教育学会) 第 52 回国際大会: 京都大学 2013 年 8 月 31 日

Fujio, M. (2013) The role of expertise for turn-taking in intercultural

business communication. The 5th Annual Tricontinental Conference of Global Advances in Business Communication (第 5 回 GABC 国際大会) (Best Paper Award 受賞): University of Antwerp. 2013 年 5 月 30 日

Fujio, M. (2013) Turn-taking strategies in intercultural business communication. The 12th Asia Pacific International Conference of the Association for Business Communication (ABC 学会 第 12 回 Asia-Pacific 大会): 同志社大学 2013 年 3 月 14 日

Fujio, M. (2012) Overseas business opportunities for the traditional Japanese crafts industry How to reconstruct and communicate brand strengths in overseas markets. The 77th Annual Convention of the Association for Business Communication (ABC 学会 第 77 回国際大会: Waikiki Beach Marriott Resort. 2012 年 10 月 27 日

藤尾美佐 (2012) 伝統工芸の海外進出を支える英語コミュニケーション能力. 国際ビジネスコミュニケーション学会 第 72 回全国大会: 西南学院大学 2012 年 10 月 7 日

〔図書〕(計 2 件)

藤尾美佐 (2013) 「国際ビジネスの場におけるコミュニケーション能力」 『コミュニケーション能力の諸相』 片岡邦好、池田佳子編 第 13 章、401-427 頁担当) ひつじ書房

Fujio, M. (2012). Needs analysis of Japanese employees working for foreign-affiliated companies Suggestions for future ESP education. In Fujio, M. et al. (Eds.) *West to East, East to West* (第 11 章 175-207 頁担当) 成美堂。

〔産業財産権〕
出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕 ホームページ等

シンポジウム・ワークショップ

藤尾美佐、大野秀樹 (2015)「ビジネス英語を大学でどう教えるか」語学教育エキスポ2015: 早稲田大学 2015年3月

藤尾美佐、大野秀樹 (2014)「大学英語教育をビジネスの実践にどう結び付けるか」語学教育エキスポ2014: 早稲田大学 2014年3月

藤尾美佐、大野秀樹 (2013)「ビジネス英語能力育成のための参加型ワークショップ」語学教育エキスポ 2013: 早稲田大学 2013年3月

森田 彰 (2012)「改めて問う、英語と企業のグローバル化」フォーラムコーディネイタ、シンポジウム司会、第38回産研フォーラム、早稲田大学産業経営研究所: 早稲田大学国際会議場, 報告書 pp.77-101. ("What is the Role of English in the Globalization of Companies?," Coordinator, R.I.B.A Open Forum No.38, Research Institute of Business Administration, Waseda University, Proceedings)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤尾 美佐 (Fujio, Misa)
東洋大学・経営学部・准教授
研究者番号: 20350712

(2) 研究分担者

大野 秀樹 (Ohno, Hideki)
大東文化大学・経済学部・准教授
研究者番号: 40343628

(3) 連携研究者

森田 彰 (Morita, Akira)
早稲田大学・商学大学院・教授
研究者番号: 60210168